

WWI BRITISH TANK Mk.IV MALE

WWI イギリス戦車 マークIV メール

解説: 斎木 伸生



■第一次世界大戦の勃発

1914年6月28日、ボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボを訪れたオーストリア皇太子フェルディナントが、セルビアの一青年によって暗殺されるという事件が発生しました。バルカン半島進出を巡ってセルビアと対立していたオーストリアは、7月28日セルビアに宣戦し、これに対してセルビアを支援するロシアは7月30日動員に踏み切りました。これを受けてドイツは8月1日ロシアに宣戦しました。

さらにドイツは8月3日にはフランスにも宣戦し、8月4日には中立を犯してベルギーに進撃したのです。さらにベルギーへの中立侵犯はイギリス世論を激高させ、同日イギリスはドイツに宣戦しました。これによりオーストリア・セルビア戦争は、玉突き式にロシア、ドイツ、フランス、イギリスを巻き込んだ、帝国主義列強間の世界戦争へと発展したのです。

ドイツはフランスの早期打倒をはかり、かねて用意されてきたシュリーフェンプランを発動させました。このプランはフランス野戦軍を撃破するためベルギー・フランスとドイツ国境の右翼に大軍を集め、大きく左回りにパリ方面に向かい、フランス軍主力を包囲殲滅しようというものでした。ドイツ軍の前進は急速でしたが補給部隊が付いていくことができませんでした。また予想外に早いロシア軍の攻撃等で兵力不足に陥ったのです。このため大包囲はあきらめられ、8月30日にはパリの手前で左に旋回して小包囲を目指す結果となりました。9月6日、パリ東方のマルヌで英仏連合軍の反撃が開始されましたが、4日間の激戦の末ドイツ軍はパリを眼前にして撃退されました。この後両軍はお互いの側面に回り込むうとして、自軍の側面の部隊を先へ先へと送り込む「延翼競争」へと陥りました。その結果、ついに戦線は英仏海峡に到達し、スイス国境までの長い長い一本の戦線ができあがったのです。

■世界最初の戦車の誕生

対峙した両軍は塹壕を掘り始め、戦線は膠着状態に陥りました。最初は半身が収まる程度だった簡素な塹壕陣地は、戦争が進むにつれ射撃壕や支援壕を交通壕が結び、機関銃座や迫撃砲座が多数設けられた、ほとんど要塞陣地に匹敵するような存在へと発展していきました。さらに塹壕線の

前面には鉄条網や防塞が設けられ、その前面にはだれも立ち入れない無人地帯が広がっていました。

このような塹壕陣地への突撃は、無謀な行為に他なりませんでした。たった1挺の機関銃が、無人地帯を歩いてくる1,000名の兵士をなぎ倒すことさえあったのです。この地帯を突破するには何らかの新兵器が必要でした。当時すでに機関銃弾を跳ね返す装甲を持った、装甲自動車は出現していました。しかし、問題はタイヤ式の装甲車には、両陣営の砲撃合戦で掘り返された、無人地帯や塹壕線を突破するための不整地走破能力がないことでした。そこで格好の解決策として目をつけられたのが、当時不整地での火砲の牽引に使用されていた、アメリカの農機具メーカー、ホルト社が開発した履帶式の牽引車輌、ホルト牽引車でした。

イギリス陸軍参謀将校のアーネスト・スウィントン中佐による戦車開発提案を、イギリス戦時国防局は却下しました。しかし、当時海軍大臣だったチャーチルが興味を示し、戦車はなんと海軍によって「陸上軍艦（Landship）」として開発されることになったのです。1915年2月、陸上軍艦委員会が組織され、3月には開発が開始されました。当初は市販型装軌車輌の流用が図られ、アメリカ製ブルック牽引車が選ばされました。9月、輸入された車体を改造した「リンカーン・マシーン」が完成。箱型の車体に円筒形の砲塔が乗っていましたが、走行性能に問題がありました。戦前の著名な自動車技師で、この車輌の開発に携わっていた、ウォルター・ウィルソン海軍大尉は、走行性能を改良する画期的なアイデアを思いつきます。車体全体を取り巻くようく履帯を配すればいいのではないか。

こうして開発されたのが「ビッグ・ウィリー」でした。その走行試験は1915年12月に開始されました。車体は巨大な箱型でしたが、最大の特徴は車体の左右側端を履帯が取り巻いていることでした。なんども奇抜な格好ですが、これで要求性能は達成されたのです。そしてもうひとつ画期的なアイデアは、左右の履帯の回転速度を変えて旋回できるようになっていたことでした。なお動力はエンジン後方のデファレンシャルギヤからセカンダリーギヤを介して、チェーンにより後部の起動輪に伝えられました。ビッグ・ウィリーはその後「マザー」と改称され、1916年2月には

マークI戦車としてイギリス軍に制式採用されたのです。

■マークIの改良とマークIVの登場

世界最初の戦車であるマークIは100輌が発注されました。新兵器の開発がドイツ側に察知されることを防ぐため、当初戦車は「Water Carrier（水運搬車）」と呼ばされました。しかしこれはトイレ（WC）を想像させるため、後に「Tank（水槽）」と呼ばれることになり、これがその後この新兵器の通称となったのです。マークIの車体は横から見ると菱形をした大きな箱で、そこをぐるりと履帶が取り巻いていました。乗員は8名で車体前部に操縦手と車長（フレーキ手兼任）、左右に砲手と機関銃手4名、後部に操向操作を行うギヤ手2名が位置していました。武装は車体左右のスponson（張り出し部）に限定旋回式に装備されていました。武装に選ばれたのは40口径57mmの6ポンド砲でしたが、機関銃だけを装備したタイプも製作され、砲装備型がメール（雄型）、機関銃装備型がフィメール（雌型）と呼ばれました。

マークI戦車が初めて戦線に投入されたのは、1916年9月15日、フレール・ケールスレット戦（ソンム会戦）で、この戦いで戦車の可能性は高く評価されたのです。ダグラス・ヘイグ元帥は1,000輌もの戦車の生産を命じましたが、これにより問題となったのは、新兵器である戦車の乗員の育成でした。この目的で開発されたのが続くマークIIで、その他細かい改良も盛り込まれていました。こうした改良は後のマークIVにも取り入れられることになります。マークIIは戦闘に使用しない前提のため、装甲板ではなく軟鋼かボイラー用の鉄板で作られていました。マークIIはメール25輌、フィメール25輌が生産されました。続いて同様の目的で製作されたのがマークIIIでした。やはり細かい改良も加えられ、メール25輌、フィメール25輌が生産されました。そして本格的な量産型となるマークIVの設計は1916年10月に開始され、1917年3月から生産が開始されました。

マークIVでは装甲を強化するため、車体の8mm厚の部分が拡大されました。武装はフィメールは変わりませんでしたが、メールでは同じ6ポンド砲でも23口径の短砲身砲に変更されました。これは6ポンド砲が海軍で必要とされて供給が追いつかなくなってしまったこと、砲身が長いとしばしば地面や構造物につかえて問題となつたからでした。その他左右のスponsonは、鉄道輸送の便のため取り外し式から内側に収納できるように改善されました。そして、車内の燃料タンクは車体後方に移され、戦闘室と分離して防弾装甲が施されました。さらに排気管にマフラーが取り付けられる等、全体的に実用性が高まっています。マークIVの生産は週20輌のペースで進められました。実際にはこの倍の数が望まれたのですが、イギリスの工業力でもそれは不可能でした。最終的に発注は1,400輌に膨れ上がりましたが、結局完成したのは1,220輌に留まりました。このうち戦車型は950輌、派生タイプの補給型は205輌で、その他は試験用等でした。

■マークIVの戦歴

イギリス軍の1917年夏季攻勢は、6月7日ベルギー西部のイーベル近郊にあるメッシーナ山嶺の攻撃により開始されました。これに続く第三次イーベル会戦には多数のマークIV戦車が投入されました。しかし戦車の行動に不向きなぬかるんだ地形のため、十分にその能力を發揮することはできませんでした。マークIVが真価を發揮するには、それによ

さわしい戦場が必要でした。その戦場となったのが、イーベルより100kmほど南のフランスのカンブレーでした。カンブレー地区はしばらく戦場となっていなかったため地面が荒れておらず、水はけも良くておむね草地になっていて、戦車の行動に適していました。イギリス戦車軍団参謀長のフランシス・ラムゼイ准将は、ここカンブレー地区で大量の戦車を投入し、奇襲攻撃を行う作戦計画をまとめました。

1917年11月20日午前6時20分、カンブレーの南西グローブル周辺のイギリス軍戦線から、381輌の戦車が歩兵を従えて前進を開始しました。これだけの戦車が一堂に会した姿は壯觀でした。戦車の前には移動弾幕が形成され、戦車の前進を支援しました。戦車は鉄条網を踏み潰し、塹壕には粗朶（そだ：細い木の枝を束状にしたもの）を投げ込んで前進を続けました。日没までに戦車部隊は、敵陣深く8kmまで進撃することに成功したのです。11月21日にもイギリス軍は前進を続け、ドイツ軍戦線深く10.5kmにまで侵攻しました。しかし、イギリス軍の成功もここまででした。イギリス軍には疲弊した攻撃部隊に代わる、予備兵力がなかったのです。このため立ち直ったドイツ軍の反撃が開始されると、結果イギリス軍はもとの攻撃発起点へと押し戻されてしまいました。こうしてカンブレーの戦いそのものはイギリス軍にとって振るわない形で終わりましたが、この戦いで戦車が示した能力は高く評価されたのです。

イギリスに比べドイツは戦車の開発に冷淡でした。しかし、連合軍戦車の活躍が伝えられた結果、ドイツ国内でも戦車の開発を決定。それがA7Vです。A7Vとは戦時省運輸担当第7課（Abteilung 7 Verkehrswesen）の頭文字をとったものでした。その結果両軍の戦車が相まみえる、世界最初の戦車戦が発生したのが、1918年4月24日の、フランスはヴィレル・ブルトヌでの戦いでした。この戦いでアミアンへの突破を図ったドイツ軍には、14輌のA7Vが集められていました。いっぽう守るイギリス軍は2個大隊の戦車がありました。しかし、運の悪いことにそのうちのマークIVフィメール2輌と追撃用のホイペッテ中戦車7輌は機関銃しか装備しておらず、「対戦車戦闘」能力を持つマークIVメールはたった1輌しかいなかったのです。

ドイツ軍は3つのグループに分かれて攻撃を開始しました。第1グループは3輌のA7Vが加わり、まっすぐヴィレル・ブルトヌへと向かいました。第2グループは7輌のA7Vが加わり、右翼を鉄道線路に沿ってブウォ・ド・アクエンヌの森に向かいました。第3グループは4輌のA7Vとともに、ブウォ・ド・アガールドの森を通ってカシィに向かうことになりました。このうち世界最初のタンクバトルの歴史を作ったのは第3グループでした。この戦いでA7Vの1輌は、マークIVメール1輌と一緒に打ちの戦車戦を戦ったのです。1時間にもおよぶ機動戦の後勝利したのはマークIV戦車でした。ただし、イギリス軍も無傷では済みませんでした。その後2輌のA7Vは、機関銃しか持たないホイペッテ中戦車を蹴散らし、その4輌を撃破したのです。

しかし、最終的に勝利したのはマークIVといつてもいいでしょう。1918年8月8日、同じアミアンでイギリス軍は大攻勢を発動しました。この戦いには戦車10個大隊、中戦車2個大隊に400輌を越える各種の戦車が集められ、戦闘の行方を左右する大きな役割を果たしました。この戦いでドイツ軍はそれまでにない大敗を喫し、第一次世界大戦は最終的に連合軍の勝利によって終結することとなりました。マークIVは世界初の戦車の本格的な量産型であり、第一次大戦中のイギリス戦車を代表する存在として歴史に名を残しています。

■マークIV メール緒元

- 全長：8,000mm、●全幅：4,110mm、●全高：2,430mm
- 戦闘重量：27.9トン、●乗員：8名
- エンジン：ダイムラー直列6気筒水冷ガソリンエンジン
- 出力：105馬力、●最大速度：5.95km/h、
- 航続距離：56km、●超壕能力：3.5m
- 武装：23口径6ポンド速射砲2門、7.62mmライフル空冷機関銃3挺、●弾薬搭載数：主砲332発、機関銃5,640発
- 装甲厚：6～12mm



■ A World Plunged into Crisis

The assassination of Austrian Archduke Franz Ferdinand by a Serbian national on June 28th 1914 triggered simmering tensions in the Balkan region to overflow, Austria-Hungary's subsequent declaration of war on Serbia starting a chain of events that quickly led the European powers into armed conflict. Germany declared war on Russia on August 1 and France on August 3, and its violation of Belgian neutrality also brought Britain into the conflict. Germany's Schlieffen Plan aimed to neutralize France swiftly and avoid simultaneous Western and Eastern war, and although they pushed to within touching distance of Paris, an Allied offensive at the Battle of the Marne from September 6 halted the German advance. Thereafter both sides tried to outflank one another, their forces reaching the coast of the English Channel in the so-called "race for the sea". The result was a mostly static front of trenches across Western Europe.

■ The First Tank – A New Step in Warfare

As the stalemate dragged on, trenches evolved into fortified lines equipped with machine guns and mortar positions, making it virtual suicide for soldiers to cross the no man's land between enemy lines. Armored cars existed, but their tires could not cope with the scarred terrain of no man's land. In Britain, Major Ernest Swinton's proposal of a tracked vehicle inspired by U.S. company Holt's tracked units was taken up by the Navy's new Landship Committee, development beginning in March 1915. An initial prototype, the "Little Willie", was finished in September and while not the perfect solution, it was a stepping stone to the design adopted on the "Big Willie" (also known as "Mother"), which saw the tracks encircling the body. The tracks facilitated steering by running at different speeds, and were moved by sprockets connected to the engine via chain, differential and secondary gears. Officially named the Mark I, an order was made by the British Army in February 1916.

■ From the Mark I to the Mark IV

To keep the Mark I from coming to German intelligence's attention, it was referred to as a (water) 'tank', a name which stuck and is still in use in the modern day. The rhomboid Mark I held 8 crew including a driver, commander/brake operator, 4 gunners and 2 drive gear operators. A "Male" type featured 40-caliber 57mm 6 pounder guns in side-mounted sponsons, plus machine guns and a "Female" variant only the machine guns. The Mark I showed promise in its maiden action in the Battle of Flers-Courcelette, September 15, 1916, but crew training was

deemed necessary and for that purpose the Mark II and Mark III vehicles were developed, both in small numbers. Mark IV design work commenced in October 1916, production starting in March of the next year. It featured increased 8mm armor areas, and the 6 pounder guns on the Male were shortened to 23-caliber to alleviate problems with the longer barrel hitting obstacles or getting stuck in the ground. The sponsons were also made retractable to facilitate easier rail transport. The fuel tank was moved to the rear, and muzzles added. 1,220 were manufactured in total.

■ The Mark IV in Combat

After operations in the Third Battle of Ypres were hampered by muddy conditions, the Mark IV was used to better effect on more suitable terrain in the Battle of Cambrai. At 6:20am on November 20, 1917 under cover of creeping barrage, 381 Mark IV tanks advanced together with infantry, striding across trenches and penetrating German lines by up to 8km that day and 2.5km further the next. While these gains were retaken by German troops, the Battle of Cambrai demonstrated the efficacy of tanks in answer to the paralysis of trench warfare.

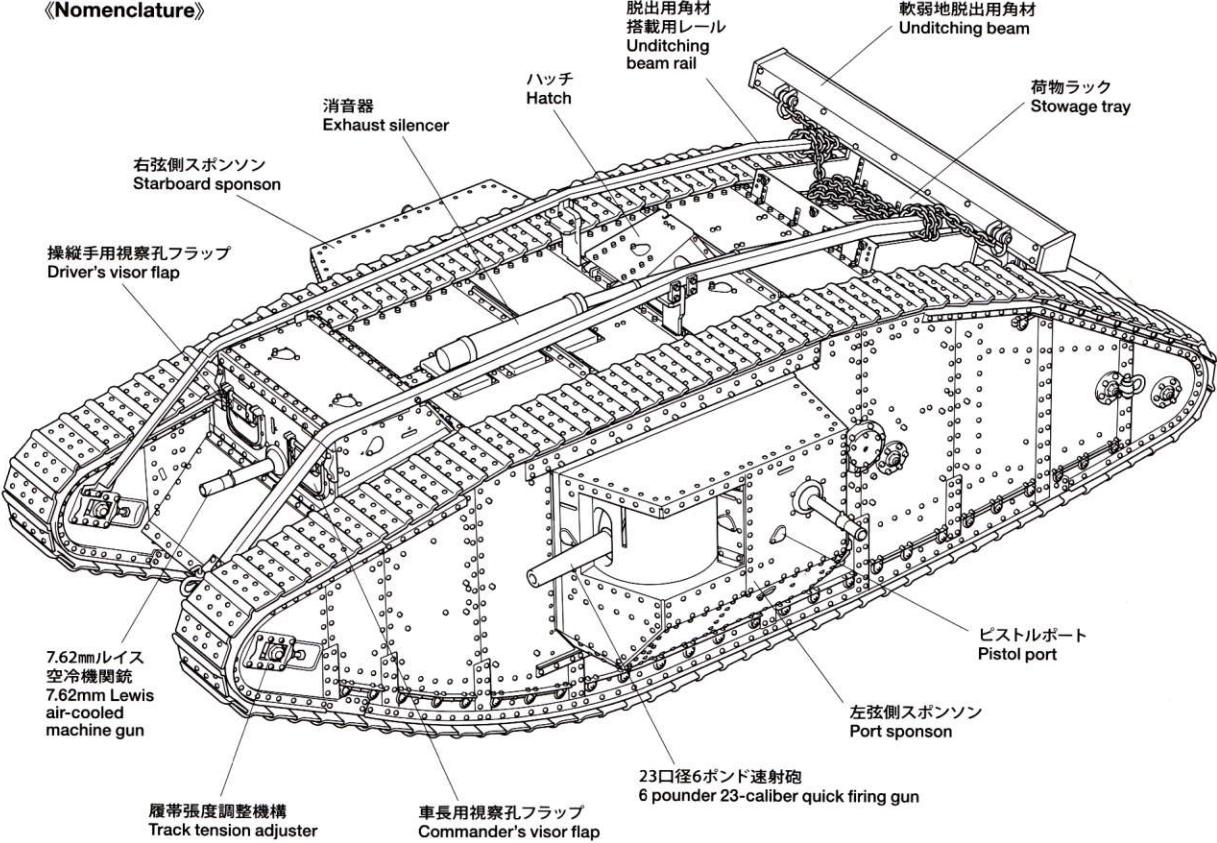
A German counterpart tank was eventually developed; known as the Abteilung 7 Verkehrswesen (A7V), it faced off against the Mark IV in the world's first tank on tank combat in Villers-Bretonneux, April 24, 1918. A single Mark IV Male engaged and eventually defeated a lone A7V after an hour of combat.

The Mark IV has a place in history as the first major production model of a rhombus shaped tank, and a major presence in the ultimately successful struggle of the Allied Army.

■ Mark IV Male Specifications

- Length: 8,000mm ● Width: 4,110mm ● Height: 2,430mm
- Weight: 27.9 tons ● Crew: 8
- Engine: Daimler sleeve valve water-cooled inline-6 gasoline engine
- Maximum Output: 105hp
- Maximum Speed: 5.95km/h ● Range: 56km
- Trench Crossing Capability: 3.5m
- Armament: 23-caliber 6-pdr gun x2, 7.62mm Lewis machine gun x3
- Ammunition Storage: 6-pdr shells x332, machine gun rounds x5,640 ● Armor: 6-12mm

《各部名称》 《Nomenclature》



■ Die Welt taumelte in eine Krise

Als am 28. Juni 1914 der österreichischen Thronfolgers Franz Ferdinand durch einen serbischen Nationalisten ermordet wurde ließen die vorhandenen Spannungen in der Balkanregion zuriick. Darauf folgte die Kriegserklarung Österreich-Ungarns an Serbien und führte die europäischen Mächte schnell in einen bewaffneten Konflikt. Deutschland erklärte am 01. August Russland und am 03. August Frankreich den Krieg. Die Verletzung der belgischen Neutralität brachte England in den Konflikt ein. Der Plan von General Schlieffen zielte darauf ab Frankreich schnell zu neutralisieren und einen Zwei-Fronten-Krieg im Westen und Osten zu vermeiden. Obgleich die Deutschen nahe an Paris herankamen stoppte eine Alliierte Gegenoffensive am 06. September bei der Schlacht an der Marne den deutschen Vormarsch. Danach versuchten beide Seiten den Gegner zu umgehen und ihre Truppen an die Kanalküste vorstoßen zu lassen, das so genannte „Rennen zum Meer“. Das Ergebnis war ein weitgehend statischer Grabenkampf über Westeuropa.

■ Der erste Panzer – ein neuer Schritt in der Kriegsführung

Grabensysteme mit Maschinengewehren und Mörsern, welche es für die Soldaten zum Selbstmord machen, das Niemandsland zwischen den feindlichen Positionen zu durchqueren wurden die Regel. Gepanzerte Autos gab es bereits aber ihre Räder waren nicht für das wilde Terrain im Niemandsland geeignet. In Großbritannien schlug Major Ernest Swinton ein Fahrzeug mit Ketten vor. Er wurde inspiriert von der US Firma Holt und deren Kettenfahrzeugen. Die Entwicklung begann im März 1915. Der erste Prototyp „Little Willie“ wurde im September fertig und er war ein Meilenstein in der Entwicklung, welcher zum „Big Willie“ (auch unter dem Namen „Mother“ bekannt) führte, bei dem die Ketten den Rumpf umfassten. Die Ketten ermöglichten eine Lenkung durch ihre unterschiedlichen Drehzahlen der Abtriebe welche mit dem Motor über Ketten, Differentialen und Untersetzungsgetriebe verbunden waren. Offiziell als „Mark I“ bezeichnet wurde der Panzer von der britischen Armee im Februar 1916 beauftragt.

■ Von Mark I zum Mark IV

Um den Mark I geheimzuhalten wurde er als (Wasser) Tank bezeichnet, ein Name der sich bis heute erhalten hat. Der Mark I mit seiner Rhombenform hatte eine Besatzung von acht Mann, bestehend aus einem Fahrer, einem Kommandanten/Bremser, vier Schützen und zwei Getriebefürediern. Der „männliche“ Typ hatte 57mm 6-Pfünder mit 40 Kaliberlängen in seitlichen Erkern, sowie einige Maschinengewehre. Die „weibliche“ Variante hatte nur Maschinengewehre. Der Mark I bewährte sich bei seiner ersten Aktion in der Schlacht von Flers-Courclette am 15. September 1916. Es wurde klar, dass ein besseres Training der Besatzung notwendig war und dafür wurden die Mark II und Mark III Fahrzeuge in kleiner Stückzahl gebaut. Die

■ Un Monde Plongé dans la Guerre

L'assassinat de l'archiduc autrichien François Ferdinand par un nationaliste serbe le 28 juin 1914 a généré de vives tensions dans les Balkans qui ont entraîné la déclaration de guerre de l'Autriche-Hongrie à la Serbie. L'Allemagne déclara la guerre à la Russie le 1^{er} août et à la France le 3 août, puis la Grande-Bretagne entra elle aussi dans le conflit. Le Plan Schlieffen allemand devait neutraliser rapidement la France et éviter ainsi une guerre simultanée à l'ouest et à l'est, mais bien que les allemands progressent rapidement et s'approchent de Paris, l'offensive alliée de la Bataille de la Marne à partir du 6 septembre stoppa leur avancée. Par la suite, les deux camps tentèrent des manœuvres de débordement, leurs forces atteignant les côtes de la Manche dans un épisode baptisé "course à la mer". Il en résulte une guerre de position avec des lignes de tranchées barrant l'ouest de l'Europe.

■ Le Premier Tank – Une Nouvelle Ère dans la Guerre

Les tranchées évoluèrent en véritables lignes fortifiées avec positions de mitrailleuses et de mortiers, rendant suicidaire la traversée du no man's land par les soldats des deux camps. Les voitures blindées existaient bien elles ne pouvaient se déplacer sur le terrain défoncé du no man's land. En Grande-Bretagne, la proposition du Major Ernest Swinton d'un véhicule à chenilles inspiré des tracteurs Holt américains fut retenue et son développement commença en mars 1915. Un premier prototype "Little Willie" fut terminé en septembre et servit à la mise au point du "Big Willie" (connu aussi sous le nom de "Mother") dont les chenilles encerclaient la caisse. Les chenilles étaient entraînées par des barbotins connectés au moteur par une chaîne, un différentiel et une transmission secondaire. Les changements de direction s'effectuaient en faisant varier la vitesse de rotation des chenilles. Officiellement désigné Mark I, cet engin fut commandé par l'armée britannique en février 1916.

■ Du Mark I au Mark IV

Pour ne pas attirer l'attention des services d'espionnage allemands, les britanniques parlaient du Mark I comme d'un "tank" (réservoir d'eau), un nom toujours utilisé aujourd'hui. Dans sa caisse en forme de losange, le Mark I abritait 8 hommes d'équipage dont un conducteur, un chef de bord/opérateur du frein, 4 tireurs et 2 opérateurs de transmission. La version "Male" était armée de deux canons 6 pdr de 57mm 40 calibres installés dans des casemates latérales plus des mitrailleuses tandis que la "Female" n'avait que des mitrailleuses. Le Mark I fit des débuts prometteurs lors de la Bataille de Flers-Courclette le 15

September 1916, mais le manque d'expérience des équipages était flagrant et c'est dans ce but que furent développés les Mark II et III d'entraînement, tous deux en petit nombre. La conception du Mark IV commença en octobre 1916, la production débutant en mars suivant. Il comportait des parties mieux blindées de 8mm d'épaisseur, et les canons 6 pounder du Male étaient raccourcis à 23 calibres pour éviter que les tubes heurtent les obstacles ou se plantent dans le sol. Les casemates étaient maintenant rétractables pour faciliter le transport par rail. Le réservoir était déplacé vers l'arrière et des silencieux d'échappement ajoutés. Au total, 1.220 exemplaires furent produits.

■ Le Mark IV au Combat

Après la Troisième Bataille d'Ypres lors de laquelle les Mark IV furent gênés par le sol boueux, ils furent mieux employés sur un terrain plus propice lors de la Bataille de Cambrai. A 6h20 le 20 novembre 1917, sous le couvert de tirs de barrage, 381 tanks Mark IV accompagnés d'infanterie enfoncèrent les lignes allemandes sur 8km et progressèrent encore de 2,5km le lendemain. Même si le terrain fut reconquis par les troupes allemandes, cette action démontre l'efficacité des tanks en réponse à la paralysie de la guerre de tranchées. De leur côté, les allemands avaient développé leur propre tank désigné Abteilung 7 Verkehrswesen (A7V). Il fut opposé au Mark IV dans le premier combat de tanks de l'histoire, à Villers-Bretonneux le 24 avril 1918. Un Mark IV engagea un A7V en solo et le mit hors de combat après une heure d'affrontement.

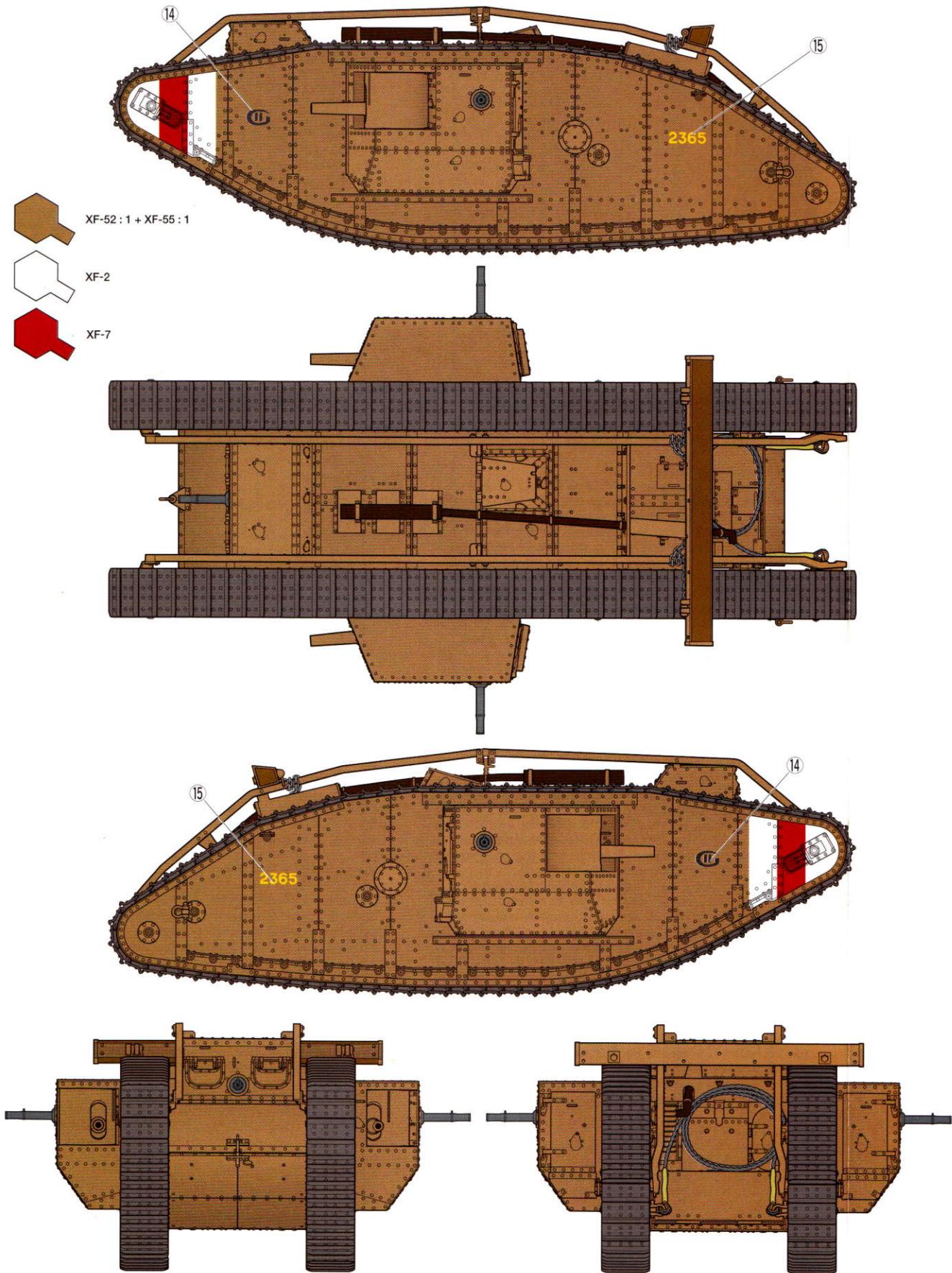
Le Mark IV mérite sa place dans l'histoire comme le premier tank en forme de losange produit en série et par sa participation non négligeable à la victoire finale des armées alliées.

■ Caractéristiques du Mark IV Male

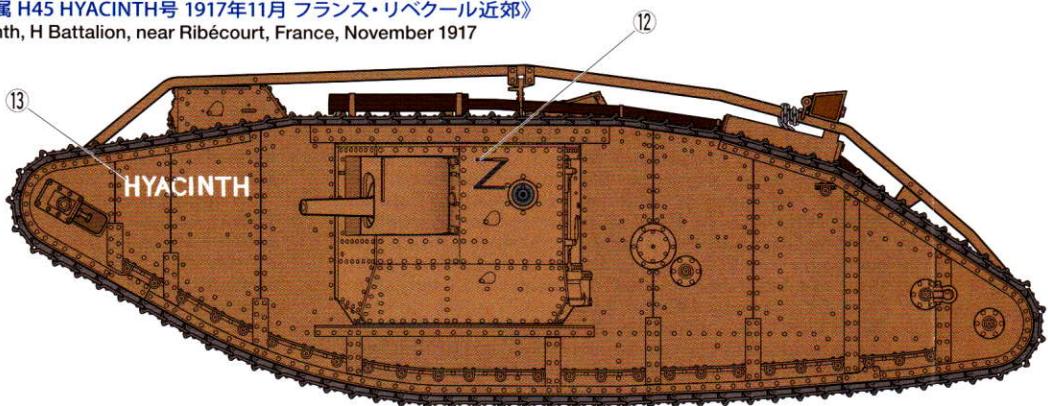
- Longueur: 8.000mm ● Largeur: 4.110mm ● Hauteur: 2.430mm
- Poids en Ordre de Combat: 27,9 tonnes ● Equipage: 8
- Moteur: Daimler 6 cylindres en ligne à essence refroidi par liquide
- Puissance Maximale: 105cv
- Vitesse Maximale: 5,95km/h ● Autonomie: 56km
- Capacité de franchissement de tranchée: 3,5m
- Armement: canons 6 pdr 57mm 23 calibres x2, mitrailleuses Lewis 7,62mm x3
- Stockage de munitions: Obus 6-pdr x332, balles de mitrailleuses x5.640 ● Blindage: 6-12mm

A 《G大队所属 GLAMORGAN号 1918年 場所不明》

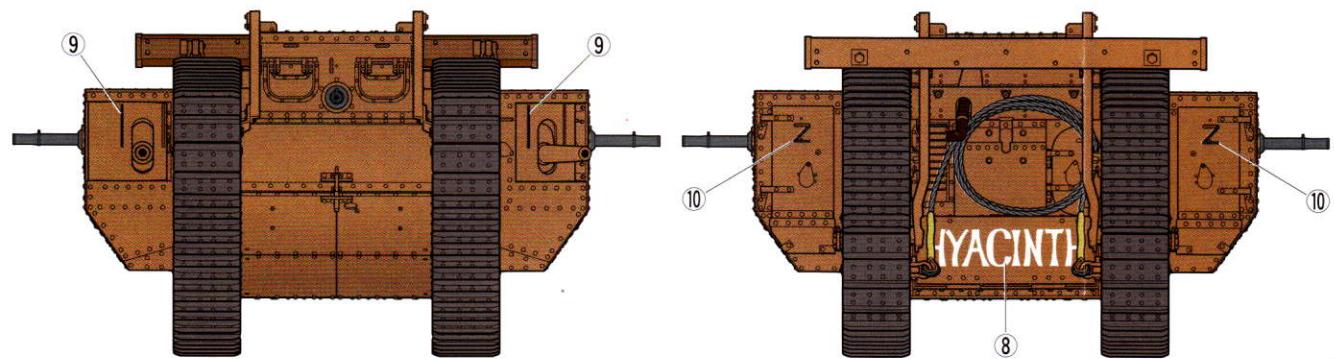
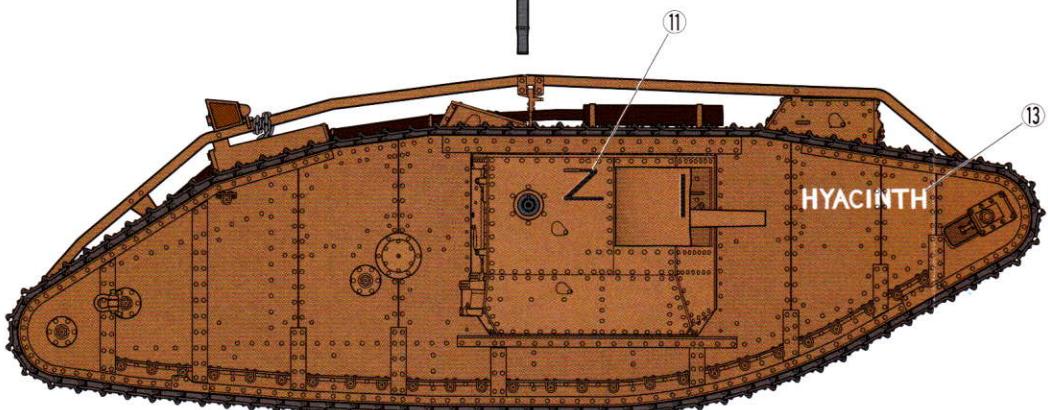
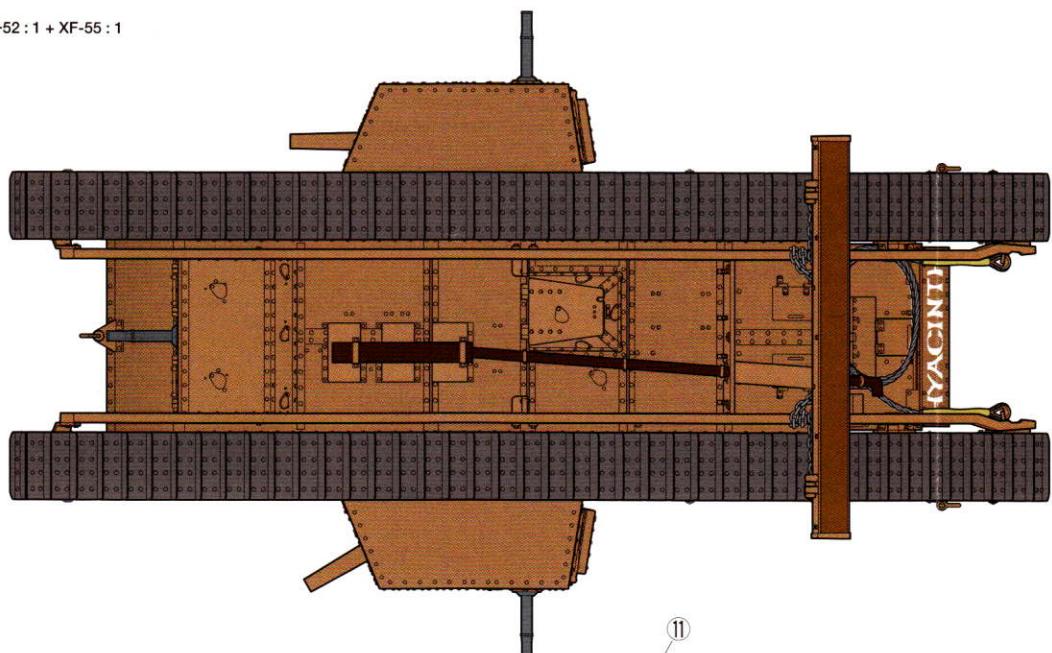
Glamorgan, G Battalion, Location unknown, 1918



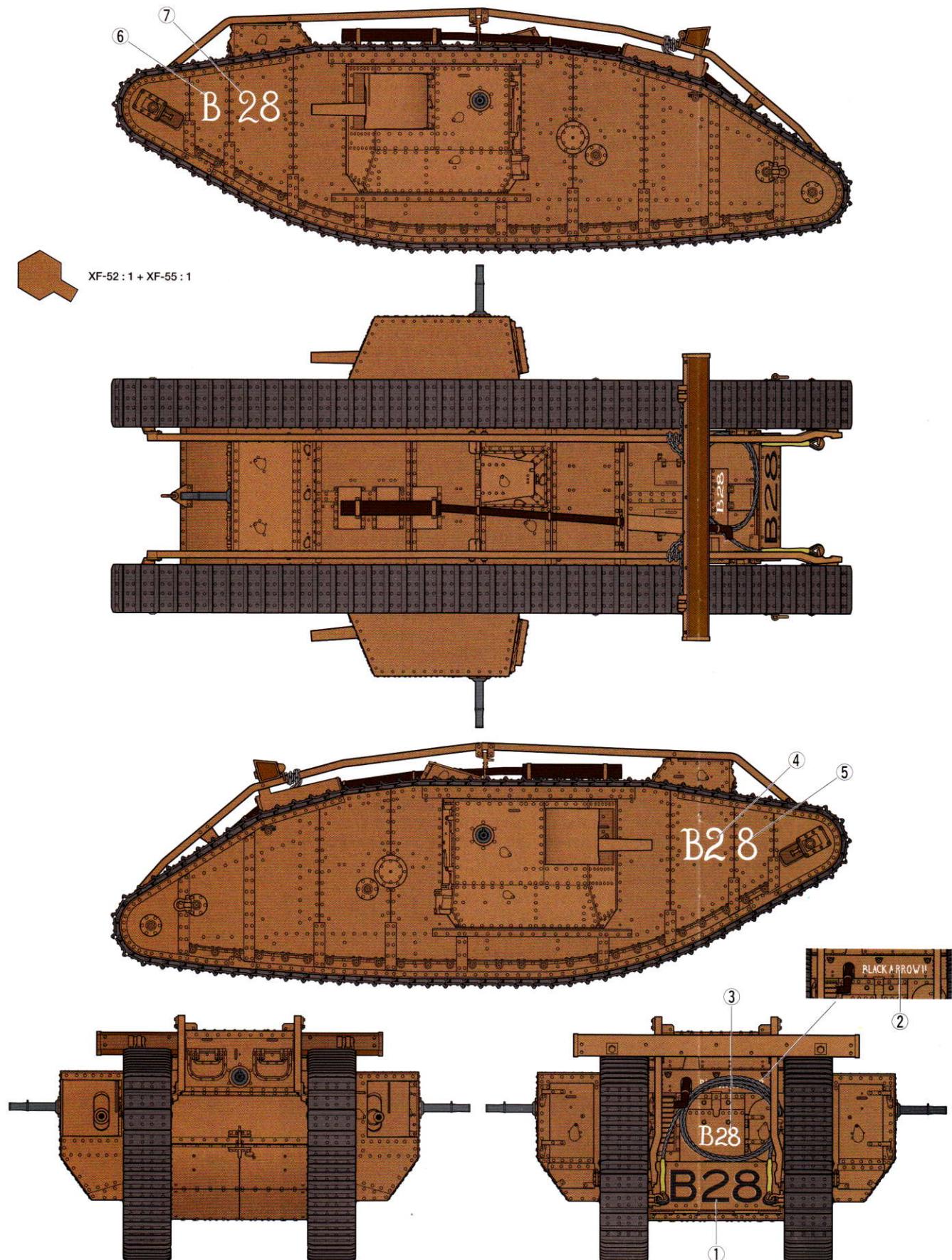
B 《H大隊所属 H45 HYACINTH号 1917年11月 フランス・リベクール近郊》
H45 Hyacinth, H Battalion, near Ribécourt, France, November 1917



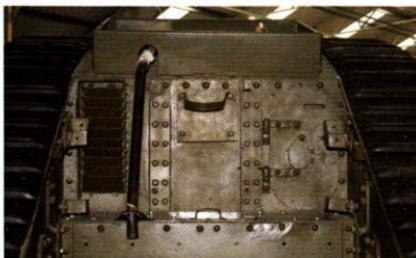
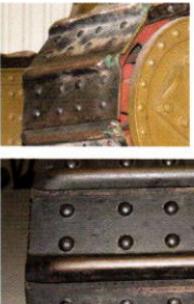
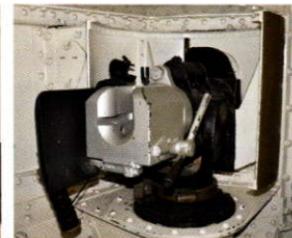
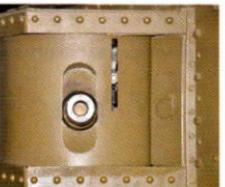
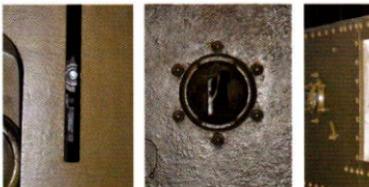
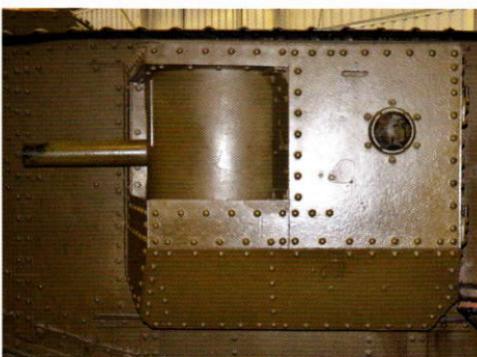
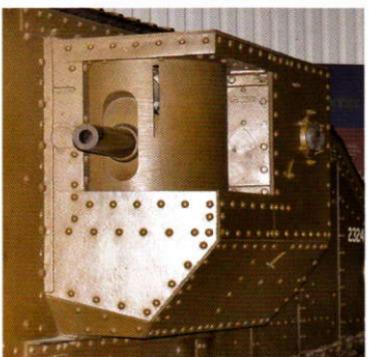
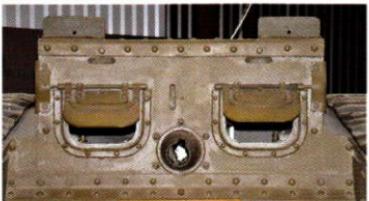
XF-52 : 1 + XF-55 : 1



C 《B大隊所属 B28 BLACK ARROW II号 1917年11月 フランス・フォンテーヌ=ノートル=ダム》
B28 Black Arrow II, B Battalion, Fontaine-Notre-Dame, France, November 1917



BACKGROUND INFORMATION



写真協力: ボービントン戦車博物館
Photo is courtesy of The Tank Museum, Bovington.

Mk-IV Male (11053844)